

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

チュコト自治管区におけるトナカイ牧畜の地域的変化について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北方文化振興協会 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008547

Regional Changes in Reindeer Management in the Chukotka Autonomous Okrug

IKEYA, Kazunobu

National Museum of Ethnology

チュコト自治管区におけるトナカイ牧畜の地域的变化について

池谷 和信

国立民族学博物館

The Chukchi are an indigenous people of the Chukot Peninsula in Northeastern Russia. The Chukchi population was about 15,000 in 1989. In the latter half of the nineteenth century, ethnographers divided the Chukchi into two groups. One group tended reindeer herds (Reindeer Chukchi); the other group lived along the coast, subsisting primarily by hunting sea mammals (walruses, seals, etc.). This group might be called Maritime Chukchi. However, due to the spread of socialism in the Soviet era, many Chukchi now work as government employees on state-run farms, sovkhoz.

This paper clarifies changes in the number of reindeer in each district in the Chukotka Autonomous Region over the past 25 years; it examines how the Chukchi have adapted to the decline of reindeer herding resulting from commercial sale, slaughter, and escape from the herd.

The author conducted fieldwork for about two and half months in Chukotka: 30 days in October and November 1997; 25 days in January and February 2000; 10 days in November 2000; and 10 days in August 2001.

Results obtained from the fieldwork are summarized as follows.

Domestic reindeer populations decreased in all districts over the period since 1987. Patterns of changes for each village in the Chaun District can be classified into three types after the collapse of socialism. Because of the decrease in the number of reindeer in Tavaivaan Village near Anadyr, the main economy of Chukchi living there has transformed itself from reindeer herding to salmon fishing. This stands in stark contrast to the fact that some Chukchi changed over from sea mammal hunting to reindeer herding in the past.

The author suggests that understanding Chukchi societal changes is crucial to discussion of the validity of the two terms Reindeer Chukchi and Maritime Chukchi when regarding multi-resource use among the Chukchi.

KEYWORDS: Reindeer pastoralism, Chukchi, Indigenous people's movement, Management organization, Salmon fishing
キーワード: トナカイ牧畜, チュクチ, 先住民運動, 経営体, サケ漁

1. はじめに

筆者は、ソビエトの社会主義体制崩壊後における牧畜の変化の実態とその要因を検討することを問題意識として持っている。そして、近年におけるロシア国内のトナカイ牧畜の実態は、生産遊牧であると同時にかつての遊牧形態をも維持している「牧畜型」(チュクチ、コリヤーク)、生産遊牧を示す「飼育型」(ウイльта、エヴェン)、個人所有のトナカイを飼養し生産遊牧ではない「遊牧型」(ネネツ)という3類型から説明できるという仮説を提示した(池谷 1999: 26-27; IKEYA 2001: 97-98)。

しかし、チュクチの牧畜に焦点を当ててみると、筆者が調査地とした村のように社会主義体制崩壊後にソフホーズ(国営農場)が存続していた所(池谷 1999)、あるいは会社組織に転じた所など様々な変化があったものと推察される。また、ソフホーズが維持された場合にはトナカイ頭数の変化はみられるのか、会社組織の場合には自立的な牧畜経営を維持できるのかなど未知なる課題が多い。

本報告では、社会主義体制崩壊後におけるチュクチのトナカイ牧畜にみられる変化の多様性を把握することを目的とする。具体的には、チュコト自治管区内における地区別のトナカイ飼育頭数や経営体の変化を過去25年間にわたって把握すること、また1つの村を事例にしてトナカイ牧畜の衰退にともないチュクチはどのような対応をしているのかを明らかにする。

筆者は、①1997年10-11月の30日間、②2000年1-2月の25日間、③2000年11月の10日間、④2001年8月の10日間の計4回、のべ2カ月半にわたって現地調査を実施した。とりわけ③④では、チュコト自治管区の農業省と統計局での資料収集とアナディール近郊のタバイバーン村での調査を行った。

筆者は、トナカイ牧畜の変化とその要因分析のためには3つの視角を統合することが不可欠であると考えている。それは、1) 中心村落、放牧キャンプ、農場経営の3要素から構成される地域社会での文化人類学的なコミュニティ・スタディー(池谷 1999; IKEYA 2001)、2) 古文書や口頭伝承を通しての牧畜

社会史の復元（池谷 2002b; IKEYA 2003 in press）、
3）統計データから見出せる地域特性の把握である。
本報告は、これまで筆者の行ってこなかった3番目の
視角に焦点をおいたものである。

一方で、現在トナカイ牧畜に従事するチュクチは
トナカイ牧畜民として把握するのではなく、トナカイ
牧畜以外の他の生業を含めた生業複合の視点から
理解する必要がある（池谷 2002b: 67）。筆者は、チュク
チが様々な環境変化に応じて牧畜、狩猟、漁労など
の比重を変えてきており、生業のなかでトナカイ
牧畜の比重が高い時には狩猟や漁労の比重が小さく、
牧畜の比重が低いと狩猟や漁労の比重が高くなるな
どの関係が存在すると仮定している。このため、現
在のトナカイ牧畜衰退の“危機”も、そのような歴

史のなかで位置づけることで、新たな見方から理解
することができる。

2. チュコトカをめぐる近年の政治経済の動向

チュクチは、ロシア北東部のチュコト半島に生活
する先住民で、1989年の人口は約15,000人を示す。
19世紀の後半において、彼らはトナカイ牧畜を生活
の基盤とする“トナカイチュクチ”とセイウチやア
ザラシを対象にした狩猟を中心とする“海獣チュク
チ”とに二分されていた。しかし1950年代にはすべ
てのチュクチが、ソビエトの社会主義化のもとでの
集団化政策の影響を受けて国営農場で働く国家公務
員になった。その後、社会主義体制の崩壊に伴い自

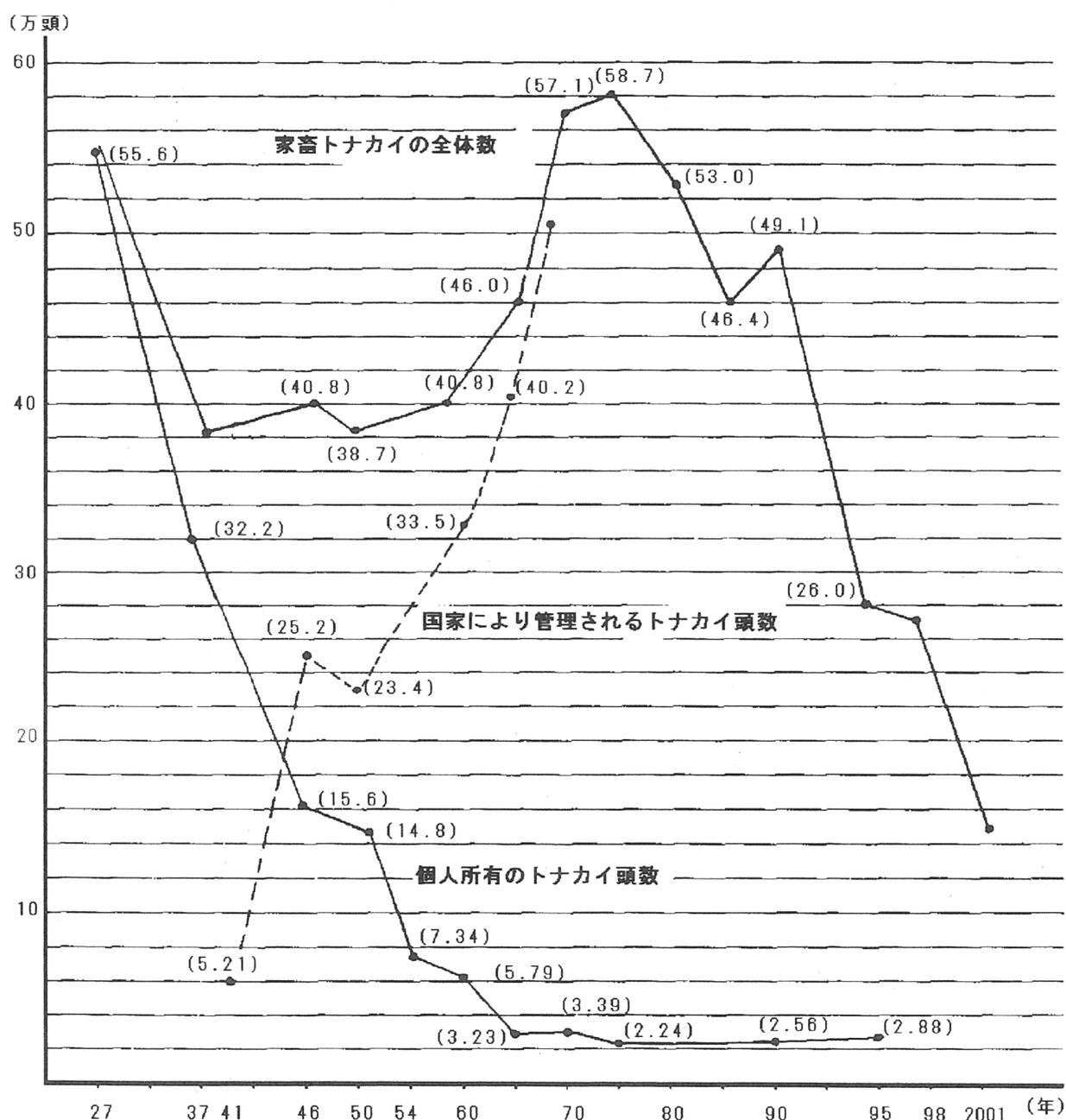


図1 チュコト自治管区における家畜トナカイ頭数の年変動

いる。その変化は、1927年には556,900頭、34年に427,400頭に、37年に322,600頭に、41年に384,700頭に、46年に156,200頭に、50年に148,300頭に、54年に73,400頭に、1990年には25,600頭、1995年に28,800頭にと微増している。

その一方で、国家により管理されるソフホーズ所有のトナカイ数は1941年以降1970年頃まで急激に増加している傾向がみられる。なお、資料の制約のために近年のソフホーズ所有のトナカイ数を把握できない。

4. チュコト自治管区内の地区別の変化

1) トナカイ飼育頭数

まず、図2でチュコト自治管区内の8つの地区とその地区内での経営体の数を示すことで、トナカイ経営の単位を示しておこう。各々の地区名と経営体数は、アナードイルスカヤ5、ベーリングスキー2、ビリビノ8、イウルティンスキー2、プロビデニア1、チャウン3、チュコトスキー2、シュミット1（2001年に2つが統合された）となっている。これら経営体はあわせて24となっている。

次に、11の経営体を選択して、1976年から2001年までのトナカイ飼育頭数の変動をみる（図3）。経営体名は、ワエギ、マルコバ、スネージネ、ウズベレ、カンチャラン、タバイバーン、ボロシュデーニエ、アングエマ、アイオン、ペベック、ヤノラナイである。この図から、2001年7月1日現在における各地区別、及び各経営体別のトナカイ頭数では、次のような傾向がみられる。第一位はウズベレ（経営体⑦；後述）で16,315頭、第二位はアングエマ（経営体⑦）

で11,166頭、第三位はペベック（経営体⑤、筆者の調査地）で9,433頭を示す。これらは、2000年の頭数である16,055、10,032、8,798頭と比べると増加しているのが特徴である。なかでもアングエマは、1990年には26,224頭、1995年には23,391頭とうまくのりきってきたが、その後、1998年には13,429頭というように急激に減少してきた。

また、1987年以降にはすべての経営体での飼育頭数が減少しているという共通性が認められた。その結果、タバイバーンとヤノラナイではその数がゼロになっていた。また、このなかの減少過程をより微細に見ると、チュコトカの各地区の特徴を3タイプに分類できる。タイプ1aは「(国営農場)維持・衰退型」で、ペベック（ウスチャオン）、ワエギ、ウズベレなどの事例が該当する。同様に、タイプ1bは「(会社)維持・衰退型」でアングエマが、タイプ2は「衰退型」でアイオンやボロシュデーニエやカンチャラン、タイプ3は「急激衰退型」でヤノラナイやタバイバーンの事例が挙げられる。

筆者は、これらのタイプによる違いは、都市からの距離で説明することができると考えている。都市から遠い経営体では「衰退・維持型」が多く、近くなると「急激衰退型」に展開するように考えられる。

2) 経営体の形成と解体

チュコト自治管区におけるトナカイ飼養の経営体には、次の7種類が認められる。①ソフホーズ(国営農場)、②会社(フェルマ)、③有限会社(略称TOO, cooperative limited)、④氏族共同体(略称CPO, country family community)、⑤株式会社(略称AO, stock company)、⑥オープン株式会社(略称OAO,

(頭)

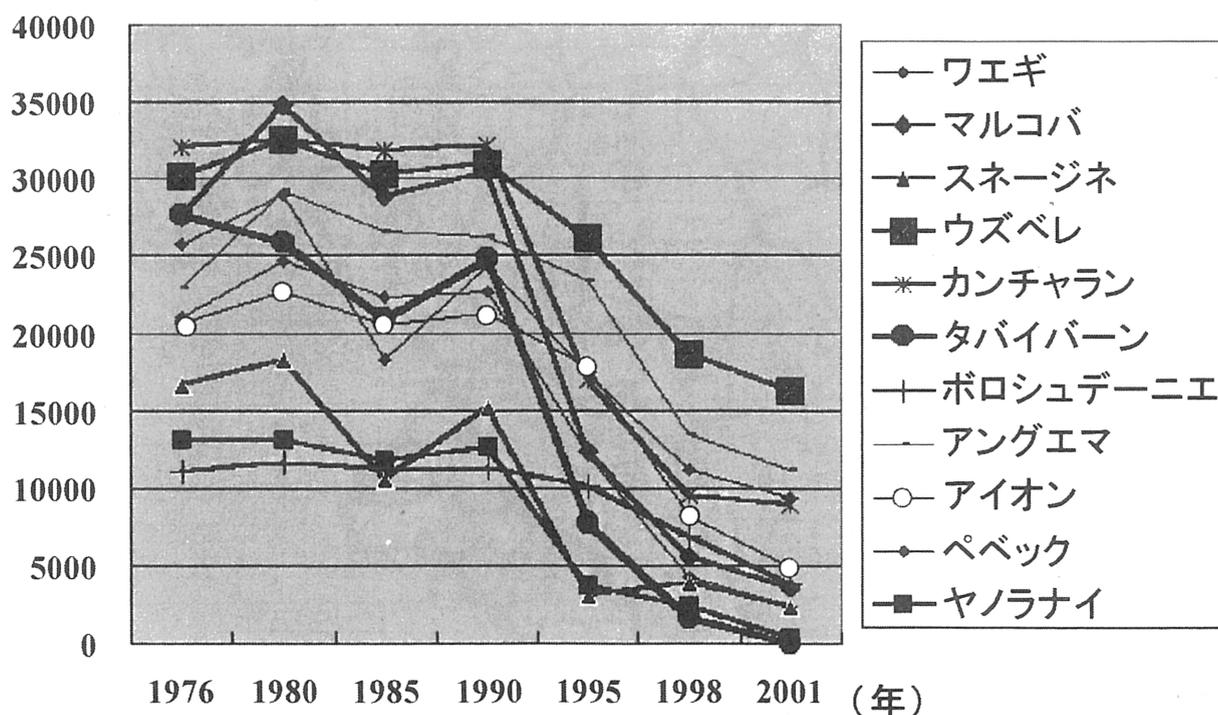


図3 経営体別のトナカイ飼育頭数の年変動

open stock company)、⑦農業労働者のための地方自治体事業 (municipal unitarian enterprise of agricultural workers)

これらの経営体の地区別における変化は複雑であり、様々なパターンが見いだせる。例えば、アナディールスカヤ地区やチャウン地区内の多くの区では①ソフホーズから⑦地方自治体事業へ、イウルティンスキー地区のアングエマでは⑤株式会社、同地区のボロシュデーニエでは③有限会社などが挙げられる。

また、変化の時期には、1994年頃、1999年、2001年頃の3つの時期が挙げられる。2001年7月に地方自治体事業 (ムニツパル) になったところが多い。シュミット地区では、2001年7月になってリールカイピとベーリングスという2つの経営体が一気に統合されてしまった。

チュコトカのなかでは、ビリピノ地区の経営体は6種類がみられその変化の過程は最も複雑であるようにみえる。現在においても、②会社、③有限会社、⑥オープン株式会社などの3種類の経営体が認められる。

このように、社会主義体制が崩壊したあとに、自由選択のためにソフホーズから会社組織に変わった地区、ソフホーズを維持する地区のように大きくは2極分化していったといえる。

5. 「急激衰退型」の村の経済変容と最近の先住民運動

ここでは、上述したように「急激衰退型」の事例としてタバイバーンを取り上げる。この村は、自治管区の中心地アナディールから約2kmの所に位置する。学校はないが、1軒の雑貨屋がある。

この村では、トナカイ飼育が衰退してトナカイ飼養頭数がゼロになったことが最も大きな経済変化である。1976年には27,645頭、1980年には25,868頭、1985年には20,846頭、1990年には24,786頭、1995年には7,721頭、1998年には1,640頭、2001年にはゼロというように、飼養頭数が急激に減少している。

この村では、1889年には海岸チュクチが、季節的に漁労に従事していた。その後、ユカギールの家族 (タバイバーン在住のユーラ氏の父親) がマルコバに居住しながら、キツネの皮を対象にした毛皮取引に従事していた。1950年代に、この村にソフホーズがつくられる。社会主義体制崩壊以前は、経済的に豊かな生活であったという。

1992年に、11のブリガーダ (生産隊) からなる国营農場は、A. チリナイ、B. トポローウェア、C. エーウーポーリャ、D. カンカレンという4つの会社に分割された。チリナイは、NO. 2、NO. 4、NO. 5、NO. 9の4つのブリガーダが統合されたものである。トポローウェアは、NO. 7、NO. 10、エーウーポーリャはNO. 1、カンカレンはNO. 6をもとにしたものである。以下、簡単に各会社の概況を紹介する。

- A. チリナイでは、1992年にNO. 2には2,000頭、NO. 4には5,000頭、NO. 5には3,000頭、NO. 9には3,000頭のトナカイが飼養されていた。1997年に、カンチャラン氏が、すべてのトナカイを屠殺した。
- B. トポローウェアでは、代表はチュクチの人 (ティーテネット氏)。彼は、30頭のブタを飼養していた。しかしブリガーダ長がすべてのトナカイ

イを失い、1995年にこの会社は閉鎖される。

- C. エーウーポーリャでは、1992年には3,000頭のトナカイがいた。チュクチの男性とロシア人の妻が経営の中心であったが、妻は自分用の自動車を購入したりしていた。1998年にゼロになった。
- D. カンカレンでは、1992年には1,500頭のトナカイを飼養していた。1997年冬には、NO. 4から500頭のトナカイが補給されたが、1999年には200頭のトナカイを失った。

さて現在、トナカイを失った人々は、何を糧にして生活しているのだろうか。現時点では、詳細な調査を実施していないが、サケ漁業による収入がその一つであることは疑いが無い。

そこで、タバイバーン村での海洋資源の利用に関する事例を紹介する。ナザロフが知事の時代には、ここで先住民の捕獲してよいサケは、18匹までとされた。現在、この管区では、先住民は一人14匹のサケの捕獲が許されている。これらは、すべて自給用である。彼らは、許可用のカードをもっていて、捕獲するたびにインスペクターがサインするようになっている。筆者の知人は、サケ漁の最盛期をすぎたのに、まったくサインがなかった。これは捕獲していないのか、捕獲してもサインをしないのかは不明である。村での干しサケをみると、上の基準は守られていない。

また、もともとはトナカイ飼養者であったという別の村人夫妻は、村から8kmのところにつつて沿岸部にてサケ漁に従事していた。この場所は、政府の監視がいき届かない場所であるという。彼らは、イクラを非合法的に売却して現金を獲得しているという。なお、この村では、アナディール湾で生息しているシロイルカの利用は見られていない。

一方で、この村では、2000年にヨント (Yonto) という名の先住民組織が設立された。この組織は、次のような人から構成されてきた。カウンセルのチェアマン: アントン (チュクチ)、副チェアマン: ユーリ (ユカギール)、商業マネージャー: ビターリ (ロシア) からなる。ここのメンバーは、40人以上がいる。このうち32人がタバイバーンに住み、8人がアナディールに居住する。また、チュクチの数が多く、様々な民族で構成されている。

主なる活動内容は、以下の通りである。彼らは、地方政府 (チュコト自治管区) に土地権を請求している。これらは、1999、2000、2001年の極北の先住民に関するロシア国アクトによって規定されてもいる。しかし、現時点では、その手紙に対する政府サイドからの明確な回答が得られていない。

6. まとめ

この報告では、チュコトカ自治管区内における地区別のトナカイ飼育頭数の変化を過去25年間にわたって把握すること、またトナカイ牧畜の衰退にともないチュクチはどのような対応をしているのかを明らかにすることを目的とした。その結果、以下のようなことが明らかになった。

- 1) チュコト自治管区におけるトナカイ飼育頭数は、1950年代、60年代に急増している一方で、1927～1954年にかけての個人所有トナカイ頭数は急激に減少している。

- 2) 各地区別のトナカイ飼育頭数は、1987年以降にはすべての地区で減少しているという共通性がみられる。また減少過程をより微細にみると、チュコト自治管区の各地区の特徴を「維持・衰退型」、「衰退型」、「急激衰退型」の3タイプに分類できる。また、トナカイ飼育の経営体には7種類が認められ、経営体の地区別の変化は複雑であるが、ソフホーズの維持か解体かの2極分化が確認された。
- 3) 「急激衰退型」のタバイバーンではトナカイ飼育頭数がゼロになったことで、チュクチはトナカイ飼養からサケ漁業に生業を変えて対応してきた。これらは、かつての海洋資源の利用から内陸資源への転換とは対照的である。それと同時に、自分たちの土地権を請求し始めている点は新たな動きである。現時点では、その請求が受け入れられてはいないが、トナカイ牧畜の衰退とチュクチのアイデンティティの変化との関係性については今後の課題である。

この報告で示したチュクチの事例は、トナカイ牧畜をやめてサケ漁業に転換した点では、かつてのチュクチが海洋資源の利用から内陸資源へと転換していた時代とは対照的であった。しかし、当時と違うのは、内陸資源に依存する人にも都市への移住者が生まれている点である。この点は、今後の課題であるといわなければならない。

参考文献

池谷和信

- 1999 「シベリア北東部におけるチュクチのトナカイ牧畜と放牧テリトリー」『北海道立北方民族学博物館研究紀要』8: 1-30
- 2002a 「シベリア北東部におけるチュクチの文化変容—チャウンスキー地区の事例から—」煎本孝編『東北アジア諸民族の文化動態』北海道大学図書刊行会 283-317.
- 2002b 「20世紀前半における“トナカイチュクチ”とアメリカ人との毛皮交易：シベリア北東部のチャウン地区の事例」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』国立民族学博物館調査報告 34: 51-69.

IKEYA, K.

- 2001 *Chukchi reindeer grazing and changes to grazing territory in northeastern Siberia.* Anderson, D. and K.Ikeya eds.: *Parks, Property, and Power: Managing Hunting Practice and Identity within State Policy Regimes. Senri Ethnological Studies* 59: 81-99.
- 2003 (in press) *Preservation of the identity of the Chukuchi amid changes in reindeer pastoralism. Senri Ethnological Studies* 64 所収